

『竜王様と御使い花嫁』

著：若月京子

ill：明神 翼

隣でレノックスが立てる喚かな寝息を聞いているうちに、竜真もいつの間にか眠りに落ちていた。

そしてまた、水の女神の世界にいる。

女神の顔を見るや、竜真は文句を言った。

「ひどいじゃないか！ オレ、世界を救うなんて無理っ。ただの会社員で、スーパーマンじゃないんだぞ！ 元の世界に戻せ！ オレを帰らせろ～っ!!」

感情のまま喚き散らすと、女神は嫌そうに顔をしかめる。

「うるさいのう。そなたがわらわの御使いとしての務めを無事に果たせたら、元の世界に戻すから安心せい」

「本当に!？」

「もちろん。役目を果たし、それでも戻りたいと言った場合は、あの日、あのときに戻すことにしよう」

「本当に、本当だな!？」

女神がウソをつくとは思えなかったが、竜真にとってはとても大切なことなので、何度だって確かめたい。

「しつこいのう。わらわは、ウソなどつかぬ。約束は守るから、そなたはがんばって役目を果たすのだぞ」

竜真が読んだり見たりした異世界トリップ物は、行ったまま帰れないことが多かった。

だからこそ心配だったのだが、女神がこれだけきっぱりと約束しているのなら本当に戻れるのだろうと希望が湧いてくる。

竜真はグッと拳を握り、力強く頷いた。

「そういうことなら、がんばる！ がんばればがんばるほど、早く戻れるんだもん」

「何年もかかったところで、戻るのはあのときだ。長くかかっても構わぬよ」

「あっ、そうか……浦島太郎にならなくてすむんだ。うわー……すごい気が楽になった」

世界を救うなんていう大変な任務なら、もしかして十年、二十年とかかるかもしれない。そのあとで元の世界に戻れたとしても、竜真の居場所はなくなっているはずだ。

だからこそ、女神の言葉は大きな安心を与えてくれた。

そして心に余裕ができると、途端に他のことが気になり始める。美しい筋肉と、精悍な浅黒い肌への未練である。

「オレの姿、元に戻してくれよ。竜族ってデカいじゃないか。こんな弱っちい姿じゃ、舐められ

る」

「わらわの使いとしてふさわしい、美しい姿ではないか」

それに対して竜真は、大いに不満だ。苦労して作り上げた、元の姿が気に入っているのである。

「どこが？ 白いし、細いし、子供みたいだし。絶対、元の姿のほうがいいって。綺麗な筋肉と浅黒い肌は、精悍で格好いいぞ」

「却下だ。筋肉筋肉うるさいのう。ああ、そうだ。そんなに言うなら、元の世界に戻るときにご自慢の筋肉を倍にしてやろう。それが褒美でいいか？」

女神は筋肉というものを、まったく分かっていない。多ければいいというものではないのだから、余計なことをされてはかえって困ってしまう。

「アホかーっ。オレは、筋肉隆々のボディービルダーじゃなく、美マッチョを目指してるんだ。筋肉倍増とか、迷惑だから！」

「分かった、分かった。うるさいやつじゃのう。もうお戻り」

そう言ったかと思うと、ポイツと女神の世界から追い出される。

「ああ、そうそう、小さな水竜をよろしくな。あの子の助けを求める声が、わらわを呼び寄せたのだ」

女神の言葉とともに、竜真の脳裏に弱々しく鳴く仔竜の姿が浮かんだ。

(水色の、小さな竜……)

そしてフツと意識が浮上し、目が覚める。

カーテンの向こう側は明るく、もう朝になっていた。

「……今の、夢だけど夢じゃないよな……帰れるんだ。よかった……」

は一っと大きく息を吐き出し、竜真はよしっと気合いを入れて起き上がる。

「そうと決まったら、がんばるぞーっ。レノックス、起きろ！ いつまで寝てるんだよ」

ぐっすりと眠っているレノックスの肩をユサユサと揺すって起こすと、レノックスは不満そうな顔をする。

「久しぶりに、気持ちのいい眠りだったのに……」

「もう、朝だからっ。早く起きて、動くんだ。御使いの務め、がんばるぞーっ!!!」

寝起きに、やたらと気合いの入っている竜真の姿を見て、レノックスは面食らっている。

「そ、そうか……御使いがやる気満々で、ありがたいことだ。では、起きることにしよう」

レノックスはそう言って起き上がると、枕元の紐を引っ張る。

すると、すぐにエルマーが飛んできた。

「おはようございます。御使い様のお衣装は、こちらをどうぞ。お手伝いいたしますか？」

「あ、大丈夫です。自分でできます」

「かしこまりました。では私は、朝食の用意をいたします」

それを合図にレノックスは自分の部屋へと戻っていき、竜真も初めての服に首を傾げつつ着替える。

太陽の暴走のせいで毎日暑いせいか、袖の短い、簡素な服なのは幸いだった。

とはいえ、高価なものなのは間違いない。薄手でヒラヒラとした袖や裾には金糸で飾り刺繍がしてあるし、胸元にも美しく豪華な金糸の花が咲いていた。

竜真はチラリと「女物っぽい？」と思ったが、与えられている身なので文句は言えない。

何より、なるべく見ないようにしていた鏡に一瞬映った姿が——女神の好みだという今の容姿にとっても似合っていたのがつらかった。

複雑な色彩を持つ水色の髪と澄んだ青い瞳。真珠色の肌。可愛いと綺麗な狭間のような顔立ち。

自分でなければ素直に可愛いねと褒めることもできるが、自分だと思えば情けないばかりである。

だから竜真はなるべく鏡を見ないように気をつけて、着替えが終わるやレノックスを追いかけて隣の部屋に向かった。

レノックスももう着替えをすませ、ベビーベッドにいる小さな竜を見つめていた。

「うわー、小さい！　可愛いっ」

竜真の言葉に、レノックスはなんとも複雑な表情を浮かべる。

「弟のアラムだ。もうすぐ三歳になろうというところだが、体が弱くて成長が芳しくない」

「そうなんだ……」

竜真は三歳の竜がどのくらいの大きさか知らないが、ベッドに寝ている小さな竜の呼吸は弱々しいものだった。

（水色の、小さな竜だ……女神を呼び寄せた子？）

「この子は、水竜？　今、他に子供の竜はいないんだよな？」

「そうだ」

「そっか……」

それならやはり、この子が必死で助けを求め、水の女神がそれに応えたに違いない。

竜真はソッと手を伸ばし、アラムに話しかける。

「アラム、苦しい？　体、つらい？」

その声に答えるように、アラムの目がゆっくりと開く。そして竜真を見つめ、ヨタヨタと起き上がってにじり寄ってきた。

「おっ、動いた。可愛いなあ。この子、抱っこしてもいい？」

「構わない」

「それじゃ……」

竜真は恐る恐る仔竜の腋の下に手を入れ、お尻を支えて抱き上げる。腕の中で抱え込むようにすると、仔竜のクリツとした水色の目が竜真を見つめてきた。

「うーっ、可愛い。デッカイ竜は格好いいけど、小さい竜は可愛いの一言だ。こんな小さいのにウロコも一枚一枚ちゃんとしてるのがすごいなあ。あーっ、可愛い」

実家で飼っていたネコを可愛がる要領で頭や首のまわりを撫でてやると、気持ち良さそうにするのは同じだ。

「気持ちいいか～そうか～可愛いやつめ～。オレも子供の頃はすごい体が弱かったんだよ。で

も、がんばって丈夫になった。だからきっとキミも大丈夫」

アラムが水の女神を呼び寄せたとのことだから、ことさら気にかけているに違いない。

癒やしの力を竜真に与えて、アラムの兄であるレノックスの前に飛ばしたのもアラムのためかもしれない。

竜真は大丈夫大丈夫と言いながらアラムを撫でた。

そこにノックの音がして、エルマーがやってくる。

「朝食の用意ができました。今朝は気持ちのいい風が吹いておりますので、テラスにどうぞ」

「アラムも一緒に食べるから、そのまま連れて行ってやってくれ」

「了解～。ご飯だってよ。楽しみだね」

「キュー」

案内されたのは町が一望できるテラスで、見事な景色と吹き抜ける風が気持ちいい。しかし太陽による過熱によって、まだ早朝にもかかわらず気温が上がっていた。

(……日本の真夏と同じくらいか？ この世界って、クーラーないんだよな？ 日中はどう過ごしてるんだろ……)

日本のように蛇口を捻れば水が出てくるというわけにはいかないし、そもそも日照り続きのせいで水不足になっている。

日本の夏より遥かにつらい状況のようだった。

「御使い様、アラム様をこちらに……」

「ああ、うん。オレのことは竜真って呼んでください。御使い様って、なんか重い……」

「分かりました」

腕の中のアラムをエルマーに渡そうとするが、アラムは竜真の服を掴んで離れようとしなない。

「アラム？ ご飯だってよ」

「キューツ」

「御使い様……ではなく、竜真様もお食事ですから、こちらに」

アラムはそれに嫌々と首を横に振り、服に爪を立てて抵抗した。

「うーん。じゃあ、オレが食べながら、アラムに食べさせるよ。アラムのご飯、持ってきてくれる？」

「申し訳ございませんが、よろしく願いいたします」

レノックスが、自分の飲み物を持って竜真の隣に移ってくる。

「では、私が竜真に食べさせよう」

エルマーともう一人の使用人らしい男性が、すでにテーブルに用意しておいた朝食を移動させる。

結局、竜真が膝の上のアラムに食べさせ、レノックスが自分も食べつつ竜真にも食べさせるという構図で食事が進んでいった。

「う～ん、こっちのご飯、普通に美味しい。オレたちの食事と似てるし。……よかった」

食の違いは大きなストレスになるから、似たような料理が並んでいるのにホッとする。

二種類のパンとオムレツ、ソーセージ……味付けもバターや塩、コショウといったシンプルな

ものである。

「アラムが食べてるのは何？」

「トリ肉を細かく叩いたものを、穀物と一緒にやわらかく煮ています」

「へー。これも美味しそうだね。アラム、美味しい？」

「キュキュッ」

「美味しいみたい」

まだ言葉は喋れないようだが、いかにもご機嫌な様子だ。

木のスプーンで差し出したそれをパクパクと食べていたが、グーッと首を伸ばして竜真のオムレツに興味を示す。

「……ん？ 何？ オムレツ、食べたいの？ レノックス、アラムって、オムレツ食べてもいいの？」

「構わない」

「じゃ、ちょっとあげよう。アーンして」

素直に口を開けるのが可愛い。アラムはどうやらオムレツを気に入ったらしく、キュキュッとご機嫌に鳴いていた。

竜真に用意されたオムレツは巨大だったので、アラムが少し食べてくれるとありがたい。

(卵四個？ 五個くらい使ってるかも……)

レノックスのオムレツはそれが二個だから、竜族はずいぶんたくさん食べるらしい。

この世界では朝が特別量が多いのか、それとも三食ともなのか……女神がもたらしてくれた知識だが、さすがにそこまで詳しくなかった。

アラムに手伝ってもらっても食べきることはできなかったので、エルマーに次からは半分くらいにしてくださいと願います。

「可憐なお姿どおり、小食なのですね」

女神好みの容姿は、竜族にも好ましいらしい。

エルマーに惚れ惚れと見つめられ、感嘆したように言われて、竜真は顔をしかめそうになった。

「食後のお茶と、甘い焼き菓子をお持ちいたします。お好きですよ？」

(なんでそう思うんだ!? この容姿だからか？ 甘いものは好きだけど、顔、関係ないから!!)

竜真は心の中で激しく文句を言いながら、自分の膝から下りようとしないアラムを撫でる。

ご機嫌のアラムを撫でていると、少し落ち着く気がした。

「竜真の膝は気持ちがいいか？ 今朝はたくさん食べたな、アラム」

「キューッ」

「もしかして、食べさせすぎた？ お腹が痛くなったら、言うんだよ」

「キューッ」

竜真を見上げて返事をしたアラムだが、お腹が満たされたせいか大きな欠伸をする。そして膝の上でモゾモゾと動いていたかと思うと、クルリと丸まって眠る体勢に入った。

「あれ、また寝るの？ 寝る子は育つっていうし、いいのかな？」

「たくさん食べたから、疲れたのかもしれない。いつもは半分も食べないんだ」

「へー」

「やはり竜真には、癒やしの力があるらしい。昨夜も、あっという間に私の頭痛を取り除いてくれた。あんなにぐっすり眠ったのは、ずいぶんと久しぶりだ」

「それはよかった。癒やしていても、どうやるかはよく分からないんだけどさ。しばらくアラムと一緒にいたら、自然と丈夫になるかもね」

「そうだな。アラムを頼む」

「うん」

お茶と焼き菓子の載ったトレイを持って戻ってきたエルマーが、それらをテーブルに移しながら言う。

「アラム様は、眠ってしまわれたのですね。ベッドに移しましょうか？」

「このままでいいです。アラム、大して重くないし」

「竜真には、癒やしの力がある。竜真に触れているほうがアラムにはよさそうだ」

「それは……どうぞ、アラム様をよろしくお願いいたします」

「はい」

「エルマーも座るといい。竜真、この男は火竜のエルマー。私の子供時代の世話係であり、右腕だ。一緒に竜真の話を聞いたほうがいい」

「分かった。オレは、天宮竜真です。この世界の住人じゃなく、他の世界から水の女神に呼び寄せられました」

「水の女神に……な、なんのために……でしょう？」

「この世界を救うため、らしいです」

「おおっ！」

縋るような目で見つめられるのは、居心地が悪い。

世界を救うなんていう大それたことが自分にできるとは思えないのに、水の女神が選んだのは竜真なのである。

しかし元の世界に戻るには、この世界を——暴走する太陽をなんとかするしかない。

だから竜真は、無理だと言いたくなるのを抑え、御使いとして使える数々の能力を二人に伝える。

「……雨乞いには、竜真様がその地に行かなければいけないのですね。でも、髪の毛を入れた水瓶を作らせれば、実際にいる必要はない」

「そうです」

「我々にとって目下の悩みは、日照りによる水不足です。尽きない水瓶があれば、ひとまずそれは解消されます」

「そうだな。水瓶を作らせるために、みなを呼び寄せよう。竜真の髪を持たせ、各地に届けるんだ」

「はい」

レノックスは立ち上がって柵の前まで歩き、空に向かってオオーンと吼える。

人間の喉から出たとは思えない声で、竜真の膝で眠っていたアラムがビクリとして目を覚ました。

「今のが、招集の合図？」

「ああ。かなり遠くの地まで行っている者もいるが、二日後にはすべての竜族が集まるだろう」

「へー」

女神の教えてくれた情報によると、ここは地球に似た世界だ。高い山や砂漠、氷に覆われた地もあった。

太陽の熱はその氷を溶かす勢いなので、氷竜が常駐して氷を補強している姿が竜真の脳裏に蘇る。

それに水竜も各地を飛び回って水を与えているので、疲労困憊のはずである。

「ところでレノックス様、太陽が少し穏やかになったと思いませんか？」

「なんだと」

空で強烈な光を放つ太陽。眩しすぎ、遠すぎて、人間の目にはどうなっているのか分からない。

けれど竜族の目は特別で、竜真には見えないものが見えているらしい。

「……炎の帯のうねりが、いつもより少ないな」

「表面の対流状態も、いつもより少ないと思います」

時間の経過とともに危険な兆候を深めていた太陽は、竜族にとって最大の関心事だ。毎日、不安とともに様子を見守ってきたからこそ、些細な変化にも気づくらしい。

「そんなに違う？ オレが来た効果なのかな～？」

「昨日までとは、様子が違う。水の女神とは、大した存在なのだな」

「すごい力を持っているんだから、自分で来て、パパパッと問題解決してくれればいいのにさ。水の女神の力は強すぎるし、この世界の住人じゃないから、下手に干渉しすぎるとまずいことになるみたいだ」

「それで、竜真が遣わされたわけか」

「オレの、母方のご先祖様は代々水龍の神官だったとかなんとか。器としてちょうどいいらしい」

「水竜……」

「こっちの竜とは違うけどね」

「そうか……不思議な縁だな」

「本当に」

さすがにこの状況のレノックスたちに対していい迷惑だとは言えなかったが、竜真の本音としてはそれだった。

だがこうなってしまった以上、全力でこの世界を救う努力をするつもりだ。がんばればがんばるだけ早くレノックスたちを楽にしてあげられるし、早く戻れるのである。

「水瓶を各地で作らせるのとは別に、オレは雨乞いをして回ったほうがいいと思うんだよ。オレの降らせる雨には癒やしとか豊穡をもたらす力が入っているから、干からびた土地を回復させる

んだってさ」

「なんと……」

「素晴らしい」

「ついでに、水瓶の中の水にも力を注げば、普通よりいい水になるみたいだ。だから、うーんと……」

どうすれば効率的なのか首を傾げていると、レノックスが言う。

「巨大な水瓶をいくつも作り、村々に設置するとなれば、一カ月くらいはかかるだろう。それまで竜真にはゆっくりしてもらって、水瓶の設置が終わったら各地を回ることにしよう」

「そうですね。竜真様の雨乞いで土地を癒やしていただき、そのあと水瓶の水を使えば効率的です。長い旅になりますから」

この世界が地球と同じくらい広いのは、竜真ももう知っている。竜の翼をもってすれば二日ほどでも、村々に降り立って雨乞いをしたり、水瓶に水を満たして回ったりするとなるととんでもなく時間がかかりそうだ。

エルマーが地図を持ってきて、どう回ればより効率的なのか話し合った。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>